

# 新構想・北海道文学史

神谷 忠孝

## 序

「北海道文学史」という概念が果たして成り立つのかという疑問は未だに解決されているとは言えない。その前に「北海道文学」という言い方に疑義を呈する意見もある。北海道を題材に表現した文学というものはある。また、北海道生まれの文学者が多くいることも確かである。これらをひとまとめにして「北海道文学」と名付けようという漠然とした了解がいまのところ半ば公認されているのが現状である。一九八二年に完結した「北海道文学全集」全三巻・別巻一（立風書房）には北海道を訪れて作品を残した文学者が多く収録されている一方、北海道出身だが北海道取材作がないために載らなかった文学者、大衆文学しか書かなかつたために載らなかつた文学者もいる。どこで線引きしたのかについて明快な答えはまだでない。こうした現状を踏まえた上で従来とは異なる視点からの問題提起を試みてみようというのが本稿の意図である。

「北海道文学史」を最初にてがけたのは白山友正である。一九三七年（昭和十二）八月十日発行の北海道庁編『新選北海道史』第四巻に「文芸の発達」として発表したものを、戦後になって雑誌「短歌紀元」第二十三巻第二号（昭和二六・二七）の別冊「短歌紀元叢書第十五編」（五十四頁、定価六十円）として発行している。白山友正（一九〇六一—一九七七）は深川市生まれ。札幌師範を経て小樽高等商業を卒業、日大文学部、立正大史学科に学び、函館師範で教壇に立った。一九一九年ころより短歌に親しみ前田夕暮に私淑。短歌の定型に疑問を抱き口語による短唱を提唱して歌壇に新風を入れ、新興短歌連盟を結成し主幹となつて活躍した。戦後は北海道学芸大学函館分校教授となつた。

「緒言」で、〈凡そ国民文学乃至、地方文学を主張する場合その母胎を為すものは、その風土に基く民族性を挙げねばならない。然らば「北海道文学」の母胎たる北海道に果してこれを見出し得ようか、概して明治維新以後の拓殖民としての新しい歴史のみしかない。かつての伝統を持たない道民には政治経済文化との交流と共に、明治大正昭和三代八十年の新しい歴史の出発を以つてしては、道民性主張の根柢は甚だ稀薄である。〉と述べている。

歴史が浅いために文学史は成り立たないという意見は当時の状況では無理もない。散文に関しては来道作家に重点が置かれ、出身作家として武林無想庵、中村武羅夫、岡田三郎、中戸川吉二、素木しづ、佐々木千之の名がある。短詩型はかなり目配りしている。

佐藤喜一（一九一一年小樽生）の『北海道文学史稿』（楡書房、一九

五六)は「北海道文学前史」「文学に現れた北海道(補遺)」「北海道文学風土記(近代篇)」「アイヌ民族を描いた文学」の諸論を収めている。これらはいずれも実証的な研究であり、後続の研究に基礎的な資料提供をしている。「あとがき」によると、一年前にこの本の三分の二の分量で自費出版して文学関係者に送ったところ、瀬沼茂樹氏から、「風土誌的な、地方主義的な研究が実証的にも必要なことは申すまでもない。それで自戒を含めて考えたいのだが、やはりそこに方法的な追究が必要などころにきているのではないか。」と指摘されたと書いている。「方法的な追究」とは一定の方向性をもった文学史の示唆であろう。一九五〇年代後半あたりから北海道の文学を体系的に考察しようという気運がでてきたようである。和田謹吾、木原直彦の活動もこのころから本格的になっている。

#### 一 モダニズムの視点

従来の北海道に関する文学史の多くは農民文学、開拓文学を主流としている。有島武郎の「カインの末裔」を端緒として小林多喜二、久保栄、島木健作、本庄陸男、辻村もと子、吉田十四雄、早川三代治などの農民ものを重視する見方である。この系譜が主流をなすことは揺るがないが、戦後の農地改革によって、地主対小作人という構図が無効となり継続性は期待できないこともたしかである。そこで、いくつかの視点を模索する必要がある。

日本のモダニズムは、一九〇九年(明治四二)ごろの「パンの会」や、雑誌「スバル」、「屋上庭園」などに結集した文学者、画家たちが、近代ヨーロッパの新風を日本文学に取り入れようとした活動にはじまった。運動として盛り上がるのは第一次世界大戦以後である。一九二〇年八月十五日の新聞「萬朝報」に「ダダイズムが紹介されたことが契機となり、平戸廉吉の「日本未来派宣言運動」(一九二二)、詩誌「赤と黒」(一九二三・一創刊)、辻潤編「ダダイスト新吉の詩」(一九二三・二)、詩誌「マヴォ」(一九二四・七創刊)などの詩運動が刺激となつて、新感覚派の中心となる「文芸時代」(一九二四・十創刊)が発行された。

日本のダダイズム運動は辻潤、高橋新吉、吉行エイスケ、村山知義などによつて推進されたのだが、もうひとり重要な役割を果たしたのが武林無想庵である。札幌の武林写真館の家に生まれた無想庵は東京で育ち、東大英文科を中退して京都新聞社に勤めたあと翻訳に専念した。ドーデの「サフォ」、アルツイーバーシェフの「サニン」などの翻訳で名をあげた。やがて、虚無的自我のおもむくままに奔放に生きる「私」と人妻との情事を書いた「ピルロニストのやうに」(「改造」一九二〇・三)で小説家として名のりをあげた。同年、「やまと新聞」の元記者で文筆業の中平文子と恋愛結婚しフランスに赴いた。バルビュスの思想に共鳴し文学者の社会参加にめざめた。一九二二年に帰国したとき、折りしも日本ではダダ運動が盛んであった。無想庵は「結婚礼賛」(改造社、一九二二・一〇)でダダ運動に共感を表明し、『文明病

患者』（改造社、一九三三・七）所収の「ミイラになりかかつて」の中で辻潤、高橋新吉への連帯感を書いている。ダダイズムの主張する反権威主義、既成道徳の否定、新しい芸術への意志に共感している。

日本のダダイズムのもうひとつの展開は村山知義によってなされた。一九二三年にドイツ留学から帰国し、翌年七月、雑誌「マヴォ」を創刊してダダイズムを基底においたアヴァンギャルド芸術運動を展開した。この運動に共鳴したのが外山卯三郎である。一九〇三年和歌山県生まれの外山は一九二三年三月、北海道帝国大学予科に入学した。同年初、肺結核の診断書を提出して大學を休学して上京、土方与志の模範舞台研究所の門をたたき、千田是也、青山杉作らと土方がヨーロッパ留学で学んできた新しい演劇を吸収した。一九二三年四月に復学しただけに学内で劇団「夢幻座」を結成。翌年の夏休み二カ月間、築地劇場で舞台に出たりして演劇の技法を学んだ。また、実家の近くに住む村山知義を訪ね、創刊された「マヴォ」に接して刺激を受けた。一九二五年四月、詩と版画の同人集団である詩学協会が札幌で結成され、外山ら学生は夢幻座を発展的に解散し詩学協会演劇部を発足させた。六月には外山が主宰する「さとぼろ」を創刊。九月発行の「さとぼろ」四号に「都市交響楽詩」を発表した。一九二六年三月、外山は京都大学文学部哲学科に進学するために札幌を去るのだが、その直前に「北大文芸」にダダ詩を発表した。

#### 瀕死の魂

花、リボン。

下駄、紋附、元結

23 688 香水

1 学位があるのですよー

ORR 海老

異質なものの同時的存在というダダ詩の理念を応用した試作である。リボン、香水などの西洋的なものと、日本的な下駄、紋附、元結が配置されている。腰が曲がったような海老をローマ字のRに見立てている。

外山卯三郎が北大予科二年目の一九二三年、旭川では小熊秀雄が詩を発表しはじめていた。「暖炉」（旭川新聞）一九二三・四・一五の書き出し「ダクダクダク×××胸／この暖気の中から女が生れる／ダクダクダク×××胸／この暖気の中から情慾が生れる／鉄瓶は踊る」という詩句にはあきらかにダダイズムの影響が認められる。一九二一年ころから活発化した日本のダダ運動は全国に波及した。北海道での展開は小規模であったが、伊藤整（一九二八）、小熊秀雄（一九二八）、小林多喜二（一九三〇）などの相次ぐ上京の背景には東京を中心に活発になったモダニズム文学に刺激された地方の文学志望者の覚醒があったことはたしかであろう。

海外で学んだ北海道出身者が帰国しはじめたのもこのころである。松前生まれで小樽に育った岡田三郎は一九二二年秋から一九二三年六月までフランスに遊学し帰国して長編小説『巴里』（新潮社、一九二四）を発表した。岡田がフランスから持ち帰ったコントという小説形式が

川端康成の「掌の小説」として開花したのは有名である。小樽生まれで北大農学部農業経済学科を卒業した早川三代治は一九二二年から一九二五年までドイツに留学し、専門の数量経済学を学ぶとともにドイツの前衛演劇を吸収してきた。母校の専任講師を務めながら学内の「北大文芸」にドイツ戯曲の翻訳を積極的に発表したことも注目される。外山卯三郎と一年重なっていることから親交があったことが推測される。

文壇に目を向けると、岩見沢生まれの中村武羅夫は大正のはじめから昭和初年までの二十年間、雑誌「新潮」の名編集長として知られた。とりわけ海外文芸思潮の紹介に力を入れ、翻訳出版を新潮社の主要企画に定着させた功績は大きい。一九二五年には菊池寛の「文芸春秋」に対抗して岡田三郎らと雑誌「不同調」を創刊した。昭和に入るとプロレタリア文学の隆盛に対して、「誰だ？花園を荒らす者は！」（「新潮」一九二八・六）を発表し、文学が政治の道具にされる風潮に警告を発した。一九二九年四月、雑誌「近代生活」を創刊し新興芸術派運動の中心となった。

新興芸術派の文学史的評価は反左翼を標榜したことで低いのが現状だが、文学が政治に従属することに意義を唱えたこと、井伏鱒二、阿部知二、嘉村礒多、吉行エイスケなどを作家として世に送り出したことは収穫であった。モダニズム文学の視点に立てば、プロレタリア文学の圧倒的攻勢に対して芸術派文学の孤塁を守ろうとする文学者に紙面を提供したことは評価されて然るべきだと考える。一九三三年ころ

から顕著になるファシズムの風潮に抗したのがモダニズム系の文学者であった事実を見る時、新興芸術派の果たした役割は低いものではない。

## 二 エンターテインメントの系譜

中村武羅夫が大正期の名編集者として活躍したのに続き、昭和の編集者として多くの作家を育てたのが水谷準である。水谷は一九〇四年函館に生まれた。早稲田高等学院在学中の一九二二年十二月、雑誌「新青年」の懸賞小説に応募し「好敵手」を発表した。仏文科在学中の一九二五年、江戸川乱歩がはじめた「探偵趣味の会」の発起人にも名をつらね、同年九月創刊の「探偵趣味」責任編集者を三年つとめた。一九二八年、早大を卒業して「新青年」編集に加わる。このときの編集長は横溝正史であった。一九二〇年創刊の「新青年」は森下雨村が初代編集長として基盤をかため江戸川乱歩、角田喜久雄、夢野久作などの作家を育てた。一九三一年、森下雨村が博文館と対立して去ったとき横溝正史も退社したが水谷はとどまって三代目編集長となった。水谷が世におくりだした作家は徳川夢声、獅子文六、小栗虫太郎、木々高太郎、久生十蘭などである。

久生十蘭は一八九九年函館生まれ。一九二六年に上京して岸田国士に師事して演劇を学んだ。「骨牌遊びのドミノ」「悲劇喜劇」一九二九・三）を発表してフランスに渡り一九三三年に帰国するまでシャルル・

デュランについて演劇を研究した。帰国後は新築地劇団演出助手となるかたわら探偵小説を書いた。「金狼」(「新青年」一九三六、七、一一)、「湖畔」(「文芸」一九三七・五)などで作家的地位を築いた。戦争中は海軍報道班員として南方各地を巡った。戦後、「ハムレット」(「新青年」一九四六・一〇)を発表したのち、「鈴木主水」(「オール読物」一九五二・一一)によって直木賞を受賞。一九五七年五十五歳で死去。「久生十蘭全集」全七卷(三二書房、一九五九)がある。久生十蘭の作品には因習にとられない発想の奇抜さ、外国人が見るように日本人や日本人をとらえる視点がある。久生十蘭を軸にすることで、戦後の北海道出身文学者との連続性が指摘できる。

長谷川海太郎は一九〇〇年に佐渡で生まれ生後間もなく両親に伴なわれて函館に移住。一九一八年、単身アメリカ各地を放浪、その間オハイオ・ウザン大学に学び、一九二四年、和子夫人とともに帰国した。林不忘の筆名で「丹下左膳」などの時代小説、牧逸馬の名で「新青年」に探偵小説、谷譲治の名でメリケン・ジャップものを書くなどの活躍であった。中でも谷譲治の名で発表した「もだん・でかめろん」(「中央公論」一九二七)におけるアメリカ都市の描写は斬新であった。

近代の都市は一個の生物である。大地にしつかり根を張り、人間を餌食にして空へ空へと伸びて行く機械文明の巨大な怪物、それはもう人間の手に成る幾何学的立体の集団などといふものではなく、人間とともに生長する一種の動物的植物なのだ。

都市を生物に見立てる都市論は日本におけるアメリカニズムの隆盛を導き、折からのアメリカ映画上映と呼応して新感覚派、新興芸術派に影響を与えた。「もだん・でかめろん」に続いて同じく「中央公論」に連載した「新世界巡礼」(一九二八・二九)も評判になった。

一八九二年、厚田村の網元の家に生まれた子母沢寛(本名梅谷松太郎)は札幌の中学から明治大法學部に進み、一九二六年、東京日日新聞社に入社、社会部の記者として才筆をふるった。一九二八年にはそれまでの新撰組研究をまとめ、『新撰組始末記』(万里閣)を処女出版した。「サンデー毎日」に発表した「笹川繁蔵」(一九三〇)、「紋三郎の秀」(一九三二)によって文壇にデビューし股旅もので人気を博した。

### 三 結

戦後生まれの北海道出身作家を概観すると、森本等、川又千秋、佐々木丸美、藤堂志津子、佐々木譲、久間十義、東直己、鳴海章、海道龍一郎、京極夏彦、馳星周などに共通するのは、地域性、風土性などにとられない自由な作風である。ジャンルも推理小説、ミステリー、時代小説、スパイ小説など多彩である。戦前の農民文学や開拓小説とは断絶しているのだが、長谷川海太郎、久生十蘭、子母沢寛、あるいはモダニズム文学などの延長上に位置づけすることは可能である。

四 北海道出身文学者一覧

北海道は歴史が浅いにもかかわらずおおくの文学者を輩出している。その全体像を示す意味で『日本近代文学大事典』、各年度『文芸年鑑』に搭載されている範囲で取り上げた。

とりあえず小説家、児童文学者、劇作家、評論家、研究者について年代順に列挙する。

(氏名)	(生年)	(出身地)	(氏名)	(生年)	(出身地)
金成 マツ	一八七五	登別	武林無想庵	一八八〇	札幌
中村武羅夫	一八八六	岩見沢	野中 賢三	一八八七	釧路
岡田 三郎	一八九〇	松前	子母沢 寛	一八九二	厚田
寺島 柁史	一八九三	根室	森田 たま	一八九四	札幌
素木 しづ	一八九五	札幌	早川三代治	一八九五	小樽
中戸川吉二	一八九六	釧路	石森 延男	一八九七	札幌
久保 栄	一九〇〇	札幌	小熊 秀雄	一九〇一	小樽
中津川俊六	一九〇一	札幌	林 容一郎	一九〇二	小樽
久生 十蘭	一九〇二	函館	佐々木千之	一九〇二	札幌
知里 幸恵	一九〇三	登別	今 日出海	一九〇三	函館
島木 健作	一九〇三	札幌	石塚喜久三	一九〇四	小樽
竹内てるよ	一九〇四	札幌	水谷 準	一九〇四	函館
更科 源蔵	一九〇四	弟子屈	八田 尚之	一九〇五	小樽
伊藤 整	一九〇五	松前	本庄 陸男	一九〇五	当別

(氏名)	(生年)	(出身地)	(氏名)	(生年)	(出身地)
和田 芳恵	一九〇六	国縫	辻村もと子	一九〇六	岩見沢
坂東 三百	一九〇六	旭川	古宇伸太郎	一九〇六	神恵内
牧野 善三	一九〇七	松前	亀井勝一郎	一九〇七	函館
井上 靖	一九〇七	旭川	寒川光太郎	一九〇八	札幌
長見 義三	一九〇八	長沼	赤木 三兵	一九〇九	旭川
長谷川四郎	一九〇九	函館	石上玄一郎	一九一〇	札幌
竹森 一男	一九一〇	壮瞥	中山 正男	一九一一	佐呂間
八木 義徳	一九一一	室蘭	佐藤 喜一	一九一一	小樽
畔柳 二美	一九一二	千歳	安住 誠悦	一九一二	洞爺
西田喜代司	一九一三	厚田	船山 馨	一九一四	札幌
小松 伸六	一九一四	釧路	金子 きみ	一九一五	湧別
西野 辰吉	一九一六	初山別	高山 亮二	一九一六	倶知安
河邨文一郎	一九一七	小樽	八匠 衆一	一九一七	旭川
木野 工	一九二〇	旭川	澤田 誠一	一九二〇	札幌
川内 康範	一九二〇	函館	滋野 透子	一九二一	岩見沢
三浦 綾子	一九二二	旭川	上西 晴治	一九二二	浦幌
千田三四郎	一九二二	礼文	大森 光章	一九二二	倶知安
木村久爾典	一九二三	札幌	坂本幸四郎	一九二四	函館
夏堀 正元	一九二五	小樽	鳥居 省三	一九二五	紋別
萱野 茂	一九二六	平取	藤本 英夫	一九二七	天塩
重兼 芳子	一九二七	上砂川	高橋揆一郎	一九二八	歌志内

加藤 幸子	一九三六	札幌	佐々木 充	一九三六	岩見沢	馳 星周	一九六四	北海道	浅倉 卓弥	一九六六	札幌
松本 道介	一九三五	札幌	川嶋 至	一九三五	札幌	石黒 達昌	一九六二	深川	京極 夏彦	一九六三	小樽
鳩沢佐美夫	一九三五	平取	笠原 肇	一九三五	留萌	蜂谷 涼	一九六一	小樽	谷村 志穂	一九六二	札幌
十津川光子	一九三四	新十津川	加藤 多一	一九三四	滝上	富樫倫太郎	一九六一	函館	小路 幸也	一九六一	旭川
宇野鴻一郎	一九三四	札幌	合田 一道	一九三四	上砂川	海道龍一郎	一九五九	函館	朝倉かずみ	一九六〇	小樽
菅原 政雄	一九三三	釧路	三田 英淋	一九三三	函館	大崎 善生	一九五七	北海道	鳴海 章	一九五八	帯広
中野美代子	一九三三	札幌	田中 和夫	一九三三	江別	今野 敏	一九五七	三笠	水室 冴子	一九五七	岩見沢
荒卷 義雄	一九三三	小樽	松本 徹	一九三三	札幌	東 直巳	一九五六	札幌	朝松 健	一九五六	札幌
安東 章二	一九三二	函館	渡辺 淳一	一九三三	上砂川	土居 良一	一九五五	札幌	桃谷 方子	一九五五	札幌
朝倉 賢	一九三二	札幌	菊地 慶一	一九三二	旭川	久間 十義	一九五三	札幌	澤井 繁男	一九五四	札幌
笠原 伸夫	一九三二	小樽	杉野 要吉	一九三二	美唄	川村 湊	一九五一	網走	外岡 秀俊	一九五三	札幌
新谷 行	一九三二	小平	倉島 斎	一九三二	札幌	藤堂志津子	一九四九	札幌	佐々木 讓	一九五〇	夕張
山口 昌男	一九三一	美幌	山中 恒	一九三一	小樽	川又 千秋	一九四八	小樽	佐々木丸美	一九四九	当別
木村真佐幸	一九三〇	真狩	小笠原 克	一九三二	小樽	森本 等	一九四七	小樽	北田 幸恵	一九四七	中標津
藪 禎子	一九三〇	芦別	三浦 清宏	一九三〇	室蘭	池澤 夏樹	一九四五	帯広	小笠原賢二	一九四六	増毛
柚木 衆三	一九三〇	増毛	針山 和美	一九三〇	俱知安	今村 忠純	一九四二	小樽	竹内 清己	一九四二	室蘭
木原 直彦	一九三〇	厚真	千葉 宣一	一九三〇	旭川	冬木 薫	一九三九	士別	長谷川 啓	一九四一	札幌
武井 静夫	一九二九	俱知安	木下 順一	一九二九	函館	沖藤 典子	一九三八	室蘭	保坂 正康	一九三九	札幌
菱川 善夫	一九二九	小樽	橋本 稔	一九二九	岩見沢	草森 紳一	一九三八	帯広	井上 彪	一九三八	池田
三好 文夫	一九二九	富良野	高野斗志美	一九二九	鷹栖	神谷 忠孝	一九三七	帯広	野坂 幸弘	一九三七	小樽
金丸 義昭	一九二八	室蘭	山田 昭夫	一九二八	札幌	十川 信介	一九三六	札幌	小檜山 博	一九三七	滝上
(氏名)	(生年)	(出身地)									

道外出身者、北海道で文学活動

(氏名)	(生年)	(出身地)	(氏名)	(生年)	(出身地)
有島 武郎	一八七八	東京	橘 外男	一八九四	金沢
宇野 千代	一八九七	山口	長谷川海太郎	一九〇〇	佐渡
山田 順子	一九〇一	秋田	小林多喜二	一九〇三	秋田
外山卯三郎	一九〇三	和歌山	木村不二男	一九〇六	秋田
吉田十四雄	一九〇七	三重	中沢 茂	一九〇九	石川
小山 清	一九一一	東京	水谷 光江	一九一六	東京
和田 謹吾	一九二二	東京	神沢 利子	一九二四	福岡
梅田昌志郎	一九二七	東京	原田 康子	一九二八	東京
川辺 為三	一九二八	樺太	南部樹未子	一九三〇	東京
武田 友寿	一九二八	宮城	沓沢 久里	一九三二	大阪
今井 泰子	一九三三	東京	李 恢成	一九三五	樺太
倉本 聡	一九三五	東京	今井 泉	一九三五	高知
亀井 秀雄	一九三七	群馬	寺久保友哉	一九三七	東京
伊藤 桂子	一九三八	樺太	栗坪 良樹	一九四〇	奉天
工藤 正宏	一九四三	青森	柴村 紀代	一九四六	台湾
片山 晴夫	一九四七	福井	桐野 夏生	一九五一	東京
小森 陽一	一九五三	東京	辻 仁成	一九五九	東京
佐川 光晴	一九六五	東京	渡辺 一史	一九六六	名古屋
長嶋 有	一九七二	東京	赤染 晶子	一九七四	宇治